

## 購入文献解題

### 『雑記帳』

編著者：松本竣介編

出版社：「雑記帳」復刻刊行委員会

出版年月：1977年6月

36歳で他界した洋画家・松本竣介（1912～1948）は、2022年にも企画展「生誕110年 松本竣介」（神奈川県立近代美術館 鎌倉別館、2022年4月29日～5月29日）が開催されたことによく示されているように、近年とみに注目が集まっている。中学時代に聴力を失った松本竣介だが、1929年、画家を志して上京し、太平洋画会研究所選科に通い、1935年、二科展に初入選を果たす。ただし、その後のキャリアは、日中戦争から太平洋戦争へと至る、苦難の時期に重なる。そうした歴史の渦中で、太平洋戦争開戦前夜の1941年4月、軍部による美術界への干渉に抗議して、松本竣介は美術雑誌『みづゑ』に「生きてゐる画家」（『みづゑ』437号）を発表した。これが、「抵抗の画家」という評言に代表される、今日の松本竣介評価の1つの鍵となっていることは間違いない。

松本竣介の文筆活動は、それ以前から、自身のアトリエ「綜合工房」を発行元とした随筆雑誌『雑記帳』において展開されていた。今回の購入資料は、『雑記帳（復刻版・全14冊）』（1936年10月～1937年12月）に、「主要目次・解題」が付されたものである。

この『雑記帳』には、松本竣介自身も多くの文章、デッサンを発表している。また、他の記事についても、単なる美術家によるエッセイにとどまらない。実に多くの書き手が文章や挿絵などを寄せており、個々のユニークな文章・イメージが誌面を飾った。また、特集されるテーマは、当時の中央論壇でトピックとなったものも多く、そうした際には、ふさわしい書き手が招かれていた。たとえば、創刊号には宮澤賢治「朝に就ての童話的構図（遺稿）」、特集には「日本的なもの、明日」（第2巻第2号）、「ヒューマニズムの動向」（第2巻第3号）などがあり、これらの編集やレイアウトなどは、すべて妻の禎子とともに松本竣介が手掛けていた。

（文責 松本和也）

『图像学与中国美术史研究』

編者：刘伟冬

出版社：南京大学出版社

出版年：2020年

本書は主に2つの部分によって構成される。1つは图像学研究の歴史概観、もう1つは图像学の視点による古代中国美術の分析である。图像学の歴史概観においては、おもにヨーロッパを中心に西洋の图像学研究の歴史的流れ、古典的图像研究とキリスト教とのかかわり、現代图像学の成り立ちと方法論などについて解説した。古代中国美術の分析においては主に漢代の壁画、彫刻を中心に、美術と仏教、道教などの宗教教義とのかかわり、图像や画面構成に含意されるシンボリックな要素などについて解説した。本書は、長らくイデオロギー的に制約された中国の美術史研究に新風を吹き込む役割を持っていると評することができる。

(文責 彭国躍)